

## 令和4年度 第3学期終業式 校長講話

皆さん、おはようございます。先月の全校集会の時に、熊谷地方の桜の開花予想は終業式あたりだと話しましたが、1週間ほど早く先週開花しました。本当に、春が身近に感じられるようになりました。

本日、令和4年度、最後の登校日を迎えました。この1年間を振り返って、どのような年でしたでしょうか。皆さんは、限られた条件の中でも、前向きに学校生活を過ごし、各自の持ち場で最大限の成果をあげてくれました。校長として、とてもうれしく思っています。

さて、去る3月10日に卒業証書授与式を行い、271名の卒業生が本校を巣立っていきました。厳粛な中、温かく送り出すことができ、卒業生たちも良い顔で卒業していきました。皆さんは参列できませんでしたが、在校生代表として生徒会長の久保田 蓮 君が、送辞を述べてくれました。その送辞の内容には、卒業生へのお祝いとお別れの言葉、コロナ禍の中にあっても、学校行事や部活動、検定試験に必死に取り組む姿を、後輩たちに見せてくれたことへの感謝の言葉、そして、次のような言葉もありました。

「私たち在校生も、先輩方が築かれた素晴らしい伝統を受け継ぎながら、強い絆で協力し合い、多くのことを学べる学校へと成長させていきます。安心して見守ってください」

このように、先輩たちに「誓いの言葉」を述べていました。そして、それに応える答辞を読んでもくれたのが、卒業生代表で前生徒会長の 鏡 君でした。。在校生の皆さんに、次のようなメッセージを残してくれました。

「在校生の皆さん、多くのことに興味を持ち、挑戦し、残りの高校生活を豊かなものにして下さい。在校生の皆さんと一緒に過ごした高校生活は、とても充実していました。またどこかで、同窓生として皆さんと会えることを楽しみにしています。」

そして、3年間支えてくれた家族、一緒に過ごした仲間、先生方、後達たちに感謝の言葉があり、最後に「深商での3年間は、一生の財産となった」という思いを述べていました。とても、心のこもった送辞であり、感動的な答辞でした。

卒業生は、高校生活の始まりは、新入生と教職員だけの入学式からスタートしました。直ぐに休校となり、再開しても分散登校が続くなど、皆さんと同じ、コロナ禍の中、いろいろな制約のある学校生活を送らなければならない状況でした。不安と戸惑いがある中で、それでも、ほとんどの生徒がきっちり進路を決めて、卒業していきました。とても素晴らしい学年だったと思います。

1年後、2年後は、皆さんの番です。同じように「3年間、深商で、高校生活を過ぎてよかった」という思いを持って、卒業して行って欲しいと思います。

さて、話を変えます。昨年11月に、全国生徒商業研究発表大会が島根県で開催されました。皆さんと同じ商業を学ぶ生徒が、授業や部活動で行った調査研究の成果を発表する全国大会です。そこに大会関係者として参加していたのですが、控え室での雑談の中で、審査員として参加している地元の大学の先生から聞いた話です。

「大学入試の面接で、最も評価が低い回答は何か。それは間違った答えでも、とんちんかんな回答でもない。『わかりません』という回答が、最も評価が低くなるんです。『わかりません』と答えた時点で、思考がストップした、考えることを止めてしまった、と捉えます。答えが間違っているでもいいんです。どういう思考の過程で経て、答えを導き出したか、そこが知りたいんです。その思考の過程が、大学に入って研究するうえで、志願している学部・学科と合っているかが大切なのです。「わかりません」と回答する人は、ある意味、正直な人だと思います。でも、大学入試の面接では、必ずしも正直さを求めているのではないのです。だから、高校の先生も、面接指導される時、考え方を少し変える必要があるかもしれませんね」というような内容の話だったと思います。

私も面接の練習のお手伝いをしたことがありますが、わからなかったら「わかりません」と正直に答えて、「学校も戻って改めて調べます」と付け加えなさい、とアドバイスしていたことがあったかもしれません。

ただ、これはあくまで大学入試の面接の話で、もしかしたら就職試験の面接で、正直さを求められている企業があるかもしれません。

日頃の学習において、単に知識だけを覚え込むのではなく、それを使って考える、いわゆる「思考の訓練」をしっかり行うことが大切だと思います。「思考」とは、辞書には「すでにある情報から新しい情報を導き出す心の活動」とあります。

こうした「思考の訓練」は、いつでもどこでもできるものだと思います。部活動でも意識して臨めば、相当な訓練になるでしょう。皆さんには、日頃からあらゆる場面で「思考すること」「思考する訓練」を実践し、それを継続して欲しいと思います。そして、一方向だけから物事を見るのではなく、できるだけ多くの視点から物事を捉え、観察し、思考を深めて欲しいと思います。

さて、改めて、学年ごとにメッセージを送りたいと思います。1年生は、1年前の今頃は、4月の高校入学を前にして、うれしさと不安な気持ちで過ごしていたと思います。あれから、1年が経ちました。体育館で行われた入学式で高校生活をスタートし、学校行事や日々の授業、部活動などを通じて、たくさんの友人もでき、深商生として大きく成長できた1年間だったと思います。自分では気づいていないかもしれませんが、4月の入学当初より、皆さんは、身体的にも精神的にも大きく成長しました。来年度は深商の中堅として頑張りたいと思います。

2年生はこの1年間、学校の中堅としていろいろな経験をしました。特に3年生が引退した後の部活動や学校行事では、学校の中心として活躍してくれました。皆さんは、いよいよ4月から3年生となります。学校行事や部活動を、最後まで頑張ることはもちろんですが、「進路を決める」という、とても重要な決断をしなければなりません。つまり、「社会の扉を開く時」が間近に迫っているということです。どの扉を選ぶかは人それぞれですが、共通するのは、自分で選び、自力で近づき、自分の手で開くということです。自動ドアなんてありません。また、開いた後の世界は様々、まさに未知の世界ですが、近づくための努力は仲間たちと励まし合いながら一緒にできる、これが学校の素晴らしさです。

「キャリアノート」を活用したり、先日の進路ガイダンスを参考したり、扉に届くまでの時間をしっかりとスケジュールリングし、自分に嘘をつかない、粘り強く最後まで諦めない、地道な努力を積み重ねてください。

さて、4月には、皆さんの後輩が入学してきます。そこで、在校生の皆さんにお願いします。「新入生の、よき手本になって欲しい」と思います。おそらく、新入生は上級生の行動を、まねていくことから始めます。新入生が、立派な高校生になるかどうかは、上級生の姿勢や生活態度に、大きく左右されると言っても、過言ではないのです。

最後になります。明日から春休みです。新しい年度を迎え、新しい学年となるこの春休みは、自分の進路を前向きに考えるよい機会です。10年後、20年後の自分を、そして将来を考える機会としてください。夢を大きく、そしてチャレンジ精神をもって、新年度を迎えられるようにして欲しいと思います。様々なことを知って、好きになって、楽しむ。生涯勉強、生涯挑戦です。

「運命」という言葉があります。これは、よく、どこかで誰かに最初から決められているように解釈されますが、そうではないと思います。「命」を「運ぶ」ことが「運命」であり、自らが創り上げ、将来を切り拓いていくもの。最も大切な「命」をどのように「運ぶ」かは、皆さん自身にかかっています。他人に運んでももらうのではなく、自分で運ぶのです。

それでは、ここにいる深商生全員が、元気で、いい顔で、新年度を迎えるよう願って、令和4年度第3学期終業式の校長講話を終わります。

令和5年3月24日

埼玉県立深谷商業高等学校 校長 西木 成男